
編集後記

所報第8号をお届けします。朝夕は、とみに肌寒くなり、教育研究・研修・実践等に目立った成果が期待される季節となってまいりました。

さて、社会未来学の教育の面での問題、トフラーの「未来の衝撃」(Future Shock)と、OECDの「リカレント・エデュケーション」(Recurrent Education)ー環流教育、回帰教育等と訳されてもいるが定着していないーについて、ー 未来の衝撃、いわゆる、われわれの未来社会には、われわれの予想し得ない変化が、継起的に起こり、人間があらゆる社会活動の面で、これらに適応できなくなり、いわゆる未来病に罹る。このような予測される症状に診断を下し、その処方箋を作らなければならないが、トフラーは教育の面で次のような点を提起している。

- ① 学ぶ方法を学ぶ教育
- ② 未来への適応は連続的選択であるから価値観を定義づけ、価値観を持たせる教育
- ③ 好奇心をうみだす教育

未来の教育の使命をこのように考え、「未来の衝撃」を回避するためには、まず、未来社会における教育シス

テムの創造からはじめなければならぬと説いている。

「リカレント・エデュケーション」についても、教育の未来像が示されているが、このアイデアは、教育期間を人生の早い時期に限定せず、人生の早期教育でなく「後期教育」を提唱している。たとえば人間はすべて生まれたときに16枚の「教育券」(Education Ticket)を得るとし、人間の一生の教育として最低限16年間を無償で保障して、最初の10年位を、継続的義務教育として6歳位から行ない、残りの6年は、本人の好む時期ーすなわち、働きながら、あるいは労働を中断して、学校へ「環る」(リカレント)というようにーに選択できるようにするものである。このアイデアは、いわゆるユネスコの生涯教育(Life Long Education)理念の政策理論とも見られる。

いずれにしても、トフラーの提唱といい、リカレント・エデュケーションといい、いずれも未来社会で人間の被る未来病という疾患から、いかにして回避するか処方箋であって、わたくしども教育の仕事に携わる者として、深く考えなければならない問題であると思われます。(S)
